

《教育長メッセージ 第29号》

『子どもの貧困』

子どもの貧困が社会問題となっています。

私は、子ども自身が貧困であることはないと思っています。なぜなら、子どもが生活費を稼ぐために仕事することはないからです。そう考えると、子どもの貧困は、その子どもが暮らす家庭の貧困であるということが出来ます。子どもを家族として生活する大人の貧困なのです。

経済的に生活が困難な家庭には、生活保護の制度があり、教育に関しては就学援助制度があり、制度としてのセイフティネットは整っています。

しかしながら、突然に失業や病気などの場合は、ある期間、急に困窮するということはありません。それでも、支援の制度を知っていて申請をすれば、長期間にわたり困窮することはないのですが。

私は、実際どれぐらいの子どもが貧困な状況にあるのか、昨年、11月、学校の教職員にお願いして調査をしました。その結果、「衣服が破損したままであり、汚れが目立つ。」「十分に食できていない。」「学校徴収金の未納が常態化している。」等の状況にある子どもが、小学校で26人、中学校で25人、合計で51人いることがわかりました。

もちろん、すべての子どもが貧困に起因しているというわけではなく、どちらかという、保護者が子どもの面倒をよく見ていないというケースが多かったようです。

確かに、中学校に勤めていた頃、金銭的に困窮しているわけでもないのに、家庭の事情で食事を充分に取れてない子どもがいました。生活は安定していないのに、携帯電話やゲーム機は持っていました。

もちろん、本当に貧困な状態であれば、先ほど述べたように、支援の制度を利用すれば、生活はできるわけですが、そこには、貧困の違った要因もあるようです。

私は、子どもがいる家庭は、子育てを中心に生活を営んでほしいと思っています。批判するという意味ではなく、我が子のために生活費を使ってほしいと思っています。

子どもではなく、大人の生活を優先している家庭も見受けられます。例えば、夜遅い時間の居酒屋で子どもの姿を見たりします。子どもはもう寝る時間なのに、どうして？

子育ては、何年間も続くことではありません。せめて、義務教育を終えるまでは、子どもを中心に生活をしてほしいと思うのです。

子どもの貧困は、時に、親の愛情の貧困、心の貧困であつたりもするの

です。子どもを中心に、にこやかな家庭でありたいものです。

例え、金銭的に困窮していても、親の愛情は、プライスレスです。



次回は、『新学期』についてです。